

續會津資料叢書

保科正之から幕末維新に至る
会津黄金時代、苦難の日々を
数々のエピソードから
怪談・奇談をも交え、立体的に描く

菊池重匡〔編〕



限定二百部復刻

上下合本



マツノ書店

白虎隊自刃図、豊後朝倉・
会津若松市隊、白虎隊の自
刃の図としては最古のもの

佐川 官兵衛

佐川官兵衛名は直清初め勝と称す、天保二年九月若松に生る、会津藩の世臣なり、父名は直道幸右衛門と称す、高祖直成勘兵衛と曰ふ、始め信州高遠に在りて藩祖保科正之卿に仕ふ、食禄千石終に世臣たり、直清少うして勇敢活潑武術を善くす。

文久二年藩主松平容保卿京都守護職となるや、官兵衛隊士として上京す、幾もなく物頭に挙げられ禄六百石を賜ふ、学校奉行に進む。

元治元年藩士の子弟を択みて別撰隊を設くるに及び、其隊長を命ぜられ、兼ねて書生組の統率に任ず。

慶応三年十月徳川慶喜公大政返上を奏請し、容保卿亦辞表を上り朝命を待つ、時局切迫し物情洶々たり、容保卿官兵衛を召して善後の策を諮ふ、官兵衛退きて齋戒沐浴し、之を神靈に訴へ開戦の一策あることを感識す、因て以て答ふといふ、十二月朝廷遽に命を下し、政体を変革し幕府を廢し、長州の罪を赦す、是に於て容保卿慶喜公に従い二条城に入る、官兵衛部下の士を率いて殿側に宿衛す、尋で慶喜公等大阪に下るを以て亦従ふ。

明治元年正月遂に伏見の戦あり、官兵衛奮戦最も力め、右眼傷けども屈せず、慶喜公感賞し、自署の書を与へて、伏見口軍事を委任す、蓋し異例なり、是より名声藉甚世人呼んで鬼官兵衛と曰へり、

旧会津藩先賢遺墨附伝

二二二

弥太之進小伝

何時の頃にか有けん、陸奥国会津の里なる若松徒の町に弥太之進と云ふ者有りけり、家系姓氏詳ならず、世人呼んで徒町を以て苗字に代ふ、相伝ふ祖先某信濃国高遠に於て始めて土津神君に奉仕し、後公の移封に従ひ、出羽国最上山形を経て会津に來り、徒町長丁に茅屋を賜はる。

世々卑官薄禄にして、班職は月割年割(士と卒との間にあり)に過ぎず、切米扶持は十位に満たず、弥太十歳にして北学館(甲賀町口青藍舎)に入學す、資性豪邁にして常に同學生と鬪争し、屢々校則を犯し罰に処せらるゝも恬として意に介せず、人呼で痴となし、之と伍するを厭ふ。

然れども、学業は頗る穎敏、人以て及ばずとす、素より身体強壯にして、炎暑酷寒にも冒さるゝことなく、日々書籍を懐にしメツパ弁当の大なるを提げ、短衣を着、腰板の折れたる短袴をはき、繩緒の金平下駄を履きつゝ歩を運び、一歳中闕席せることなし、是を以て等級類に昇進す。

十五歳の頃より、弓、銃、槍、刀、居合業、水練の諸武術に入門す、武技亦敏捷にして、二十三歳の暮迄には、尽く免許を得たり、就中槍法と水練とに長ず、平素身を処する極て樸野、暑中は短布を腕まくりして徘徊し、寒雪中は厚綿入に平袖なる襦袢に限り、羽織を用ふること稀なり、夏は蒲団冬は蚊帳を質蔵に入れ替つゝ寒暑に堪て晏如たり。

其腰間左には無地鍔に鉄の鳩丸金具の大小刀を柄先下りに横たへつゝ自ら言ふ、大は初代長道延宝の裏銘附の作にして、重代の業物、両車土壇弘の切銘有り、小は摺上の無銘なれども備前長船物の目に利に紛れなしと、右には五合枘の大きな桐の木胴乱に荒切烟草を詰めたるを紐長に揺り下げ、手には稽古槍の折れ柄を用作りたる四尺余りの太き樫の木杖を携ふるを常とし、或は人と争て放打すること有り、動もすれば上班なる士人をも凌ぐの挙動少なからず。

『続会津資料叢書』の読みどころ

作家 中村 彰彦

菊池重匡編『続会津資料叢書』上下巻は、編者が大正時代から昭和初期にかけて蒐集し、みずから謄写印刷した会津関係史料十五編全五冊を二巻に分けて再録したものである。表題に「続」とあるからにはそれに先立って『会津資料叢書』も刊行されたのであるが、こちらはさほど内容のあるものではないので「続」のみが覆刻されることになったのだ。

ではまず上巻に収録された七編の史料の内容から紹介してゆこう。

著者不詳の「唾者の独見」は、会津藩初代藩主保科正之に仕えた藩士六十四人の評伝集。初代城代家老となった保科正近、その後任であり、「天下の名家老三人のうちもっとも勝れた人物」といわれた田中正玄などを調べる場合、これは必見の史料である。

「会津干城伝」は寛政九年（一七九七）、会津藩士中野義都の編んだもので、やはり保科正之に仕えた藩士五十二人の伝記であるためと重複する記述がなくもない。ただし、こちらは藩士たちのエピソードを多く採録しているので、と併読するのがよろしからう。

「松平系譜」は文政二年（一八九一）に一枚刷りとして版行された会津松平家（三代藩主保科正容の時代に將軍綱吉の命によって松平に改姓）の家系図。保科正之から第七代藩主松平容衆までを扱っており、これら七人の藩主たちの正室、継室、側室の略伝も添えた丁寧な作りである。

著者不明の「会津老翁夜話」は、保科正之の時代を生きた老人が当時のことを回想した四十一カ条の逸話集。断片的な記事もあるが、に登場する人物の「おや」と思いたくなるエピソードもふくまれているので注意して読みたい。

「会津四季往来」と「会津往来」（ともに作者不詳）は、かつての初等教科書であった「庭訓往来」の筆法によって鶴ヶ城や城下の様子、名所旧跡などを紹介するもので、江戸時代の会津の寺子屋では郷土を理解するためのテキストとして使用された。

から までを読みすすめると、古き良き時代の会津を懐しむ編者の思いがひたひたと伝わってくる。しかし、上巻の最後に置かれた、やはり作者不詳の「評百」によってトーンはがらりと変わる。これは会津藩が戊辰戦争に敗北して滅藩処分とされた直後の風俗を描いたもので、高利貸しや女郎屋がふえたこと、偽金造りをおこなう者がいることなどに言及し、戦後の城下の荒廃ぶりをあまさずあきらかにしているところに特徴がある。

つづいて下巻に収録された史料は、著者不詳「浮世莊子」、渋谷原岬撰「徒町百首俗解」、菊池重匡編「捷覧会津年表」、おなじく「会津災異年表」、著者不詳「松平小君略伝」、馬島瑞園編「旧会津藩先賢遺墨附伝」、芥川清茂著「老翁茶話」、山崎泉撰「告学者文」の八編である。

これらのうち は保科正之、田中正玄らの霊があらわれて後生の会津藩重臣たちを批判するという趣向の物語。 は題名通り年表の一種、も儒学者が師の教えを伝えたものでしかないの、他の四編の史料の特徴のみを紹介する。

会津藩の城下町若松（今日の福島県会津若松市）の東郊、東山

温泉の手前には、徒町といって切米を十石以下しかもらえない薄禄の下級武士たちの住む一帯があった。「弥太」と総称される住人たちは切米だけでは食べてゆけないから内職に努め、女たちは前庭にカボチャを育ててこれを主食とした。一年の楽しみといえば彼岸獅子を見物することだけという弥太たちの喜怒哀楽をユーモアたっぷりの狂歌で描いたのが、であり、たとえば彼岸獅子に扮した弥太の姿はつぎのように詠まれた。

これからは弥太が冠るぞ獅子頭とひよれ とタぐれの道

冬になつても炭を買えない弥太たちの家では、炬燵に赤椀を伏せてそれを炭火に見立てるといふ究極の痩せ我慢をした。

徒の町土塀南瓜の霜がれて赤椀伏する時は来にけり

仙台藩士には奇抜な軍装を好む者が多くて、「伊達風」と呼ばれたのに対し、会津藩を支えた下級武士たちの質実剛健の精神は「弥太風」と呼ばれた。は狂歌百首によってその「弥太風」を描いた傑作であり、ここに描かれた弥太たちの愛敬あふれる言動を知れば、みなさんの会津藩に対する重いイメージは一変することであろう。

さらに は、保科正之から第六代藩主松平容住まで六人の藩主の夫人と侍妾たちの伝記集として貴重な史料であつて、と併せ読むのがよいかと思う。正之の生母おしづの方が二代將軍徳川秀忠に見初められた経緯もあきらかにされているが、かつて私がかつとも注目したのは、正之の側室から継室に直つたおまんの方がお国御前の産んだ松姫に嫉妬し、毒殺を謀つて実の娘お徳の方（米沢藩主夫人）を誤殺してしまつた史実まで明記していることであつた。藩主一族にとって不都合なことも隠さずに書くというのが、会津藩の一級史料に共通する美点でもある。

は、会津藩最後の藩主松平容保、家老としてそれを輔佐した山川浩、佐川官兵衛など幕末に活躍した十七人の伝記集。これらの人々の別の伝記史料は会津若松市立会津図書館によく集められているので、これから会津藩の幕末史を研究しようという方にはこれらを併読することをお薦めしたい。

は以上十三編の史料とはまったく趣を異にする怪談奇談集だが、なかなか良く出来た話がたんとあることに感心した記憶がある。

これら十四篇を精読すれば、もっとも会津藩政の充実していた保科正之の時代から幕末維新期に逆風の時を迎えるまでの会津史の流れを立体的に受け止められるようになるであろう。私個人も昭和の末に本書を入手して以来、たびたび各編を読み返しながら会津史に材を得た歴史小説や史論を書きつづけてきた。

『名君の碑 保科正之の生涯』（文春文庫）、『会津のこころ』（PHP文庫）などを書くことが出来たのは本書に負つところが多く、昨年出版したアンソロジー『会津の怪談』（廣済堂出版）に収録した短編小説のうちには を出典としたものもあることをこの際明記しておくことにしよう。

ちなみに、編者菊池重匡が本書原本を謄写印刷して配布したのは死亡する昭和五年八月二十二日以前のことだが、書籍としての『続会津資料叢書』上下巻は、昭和四十九年（一九七四）五月二十日付で歴史図書社から刊行された。定価は上下揃いで一万六千円。

今回は四十年以上も経つての覆刻となるが、マツノ書店のこゝだから定価を原本とほぼ同等に抑えた良心的な本造りをしてくれるだろう。この貴重な史料集をあえてひろくお薦めするゆえんである。

略目次

上巻

① 唾者之独見上

田中正玄・北原光次・内藤自卓・西郷近房・築瀬正真・井深重吉・小原光俊・柳直好・神保長利・三宅重直・堀長季・沼沢忠通・杉浦成信・原田種次・日向次房・萱野長則・加須屋武成・山崎定矩・竹村半右衛門・小川自閑・坂本義部・安部井武譽・江上胤勝・大村太兵衛・片桐長嘉・木村有益・山田直明・川手昌武・笹沼勝尹・西川重次・円成寺吉忠・諏訪光徳

唾者之独見下

保科正近・友松氏興・今村盛勝・安達知世・菅直忠・松倉重頼・藤木弘基・成瀬重次・山田重吉・岩崎久藩・橋本虎備・名倉信充・大道寺師繁・車隆次・安藤有益・小泉安治・石川八右衛門・堀尾政勝・安武太郎右衛門・鮎川市左衛門・新見重弘・遠山才兵衛・梶原景信・横田俊益・向井吉重・松原権右衛門・猪狩作太夫・芦野三右衛門・赤佐武澄・玉目丹波・脇坂金元・坂井次重

② 会津干城伝上

上太夫田中三郎兵衛正玄・上太夫友松勘十郎氏興・岩崎助左衛門・上太夫保科民部・菅勝兵衛・上太夫内藤源助・長坂平左衛門光珍・横田山入俊益・服部安休・蚕養神主佐瀬大膳亮・蓮沼儀衛門由道子・松本新藏・佐瀬主膳正・小櫃与五右衛門

会津干城伝下

上太夫梶原平馬・坂本覚之進・広田十左衛門・安藤市兵衛・篠原助太夫・小泉仁左衛門・木俣玄可・安藤利右衛門・山田守左衛門・金田伊左衛門・遠山故犬・宮下七左衛門・片桐善左衛門妻・中野作左衛門・森惣兵衛・一宮左太夫信嗣・小松新十郎・円城寺後彦九郎忠良・黒坂金太夫・鮎川弥五兵衛女・成田源兵衛・志賀与左衛門・野出且左衛門・中林弥一右衛門・佐藤与一左衛門・池上文左衛門・橋本主殿助・上高庄右衛門・土屋一庵・木村弥平治・池上善兵衛

③ 松平系譜

④ 会津老翁夜話

牧溪筆御掛物の事

正宗の御腰の物の事

台徳院様御書の事

腰拔浪人鞆野が事

源太左衛門阿房弘の事

針生何某罪科の事

百姓作左衛門が事

阿武太郎左衛門が事

安達平八が事

松本十右衛門・原九郎左衛門が事

沼沢出雲が事

三春の城主乱心の事

高坂源五郎が事

車伝右衛門・安藤六郎兵衛が事

松本弥一右衛門・高禄召抱事

宮本四郎左衛門切腹の事

安部家へ給仕役を貸し遣わされし事

松姫君様の事

松姫君様加州侯へ御輿入後の事

御咄相手

真綿裁許の事

菅勝兵衛存寄申上る事

橋本主殿剛直並に改名の事

森宗兵衛盗賊を屈伏せしめし事

紀州侯と御対面の事

榎木三郎左衛門尾州家へ御使

に参りし事

浅井内記強酌の事

信濃守様御著座の事

矢木主税御出入の事

小鼓打島田理兵衛が事

小川金左衛門傍輩の事

江上隼人大力の事

飯田兵左衛門冤罪を助けし事

同人強盗を防がしめし事

黙水和尚徒弟を訓戒する事

同和尚修業の事

横山氏名僧に逢いし事

井上金右衛門山奉行被仰付事

松沢瀬兵衛不念の事

白井氏築城に巧者なる事

⑤ 会津四季往来、⑥ 会津往来、⑦ 評百

下巻

⑧ 浮世莊子、⑨ 徒町百首

俗解、⑩ 捷覧会津年表、

⑪ 会津災異年表、⑫ 松平小君略伝、⑬ 旧会津藩先賢遺墨付伝

松平容保・山川浩・佐川官兵衛・西郷近慮・安倍井帽山・高津

溜川・松本寒緑・秋月胤永・神保修理・広沢安任・木村蕉陰・南摩羽峯・赤羽松陽・莊田胆齋・小笠原午橋・添川完平・大庭

恭平

⑭ 老翁茶話、⑮ 告学者文

同人強盗を防がしめし事

右同人南山郡奉行なりし時、何れの村の山伏ならん那須の湯に行きしに入合の中に、何とも合点のなき者共三人有之、南山村所道筋をくわしく尋ね、第一は有徳者の事を繰返し／＼念頃に尋ねける故、不思議に思ひ早々歸りて、其趣を所の名主に語りければ、聞捨てになり難しとて、早速兵左衛門方に申出づ、定めて盜賊共にて有之べきまゝ来ることもあるべし。

若し筒様の怪しき者来り候はゞ、昼は野山にかせぎに出で、男は居合まじ、女共屋の上に登り村々にありし念仏講の時の鐘太鼓を打ち立て、残りの女共は鉄砲刀・脇差何なりとも、刃物の有合棒熊手類にても持出で野山へ出し、親兄弟夫共に渡すべしと兼て教へ置きけるに、果して三人の盜賊共来り何とかや申せし有徳なる者の方に白昼押込みしに、親は居らず十八九歳ばかりなる俣一人居りしをとり、金の有所を兼ね一命をもとられ候はん勢故有のまゝを申し、金箱はあれに有之たんすなりと、教へければ則ち打ちこわし金子百五十兩とやらん有りしを取り、其儘鬧しく立出づ、其内に早鐘太鼓を打立て、何方共に在郷の女共は鉢巻にて、雪袴といふ着し、男女の差別見分がたきが、爰彼に立渡り居りし故、足早に山の方へ出し者共鐘太鼓を聞付け走り帰る故、大勢になりて追掛けしまゝ、急ぎ山の内へ入らんとせし内、一人山際にて鉄砲を以て討殺す、残り二人の内一人走り帰り討殺されし者の首を取つて引き上げ、山へ駈け入る段々大勢集り、終に三人共鉄砲にて打殺す。扱死体を改め見候処、何時の間に配分せしや、五十兩宛三つに分け持ちしとなり。

▼「内容見本」でもよくお分りの通り、会津の人々の具体的な日常をありのまま伝え、他藩に知られたくないエピソードや、古く良き時代の風俗で占められた異色の資料集です。▼すべて官まかせの長州あたりの出版物には絶対に見られない姿勢で、会津のすぐれた一面を知るための貴重な文献。▼今回はわずかに「二百部限定」の先作りですすでに印刷を終え、製本中です。売り切れの際は平にお許し願います。

■ 体裁
A5判・箱入上製八八〇頁

■ 定価
一万八千円(税・送料別)

■ 特価
一万五千元(税・送料別)

■ 特価締切
二十八年七月十日

限定二百部 (番号入)

山口県周南市銀座2-1-13
〒750-8342 083-9422-295

マツノ書店
URL <http://www.matuno.com>